



TITLE:

# アングロ・サクソン時代の社會單位について(下) - 英國に於ける地縁團體の成立過程 -

AUTHOR(S):

竹中, 靖一

---

CITATION:

竹中, 靖一. アングロ・サクソン時代の社會單位について(下) - 英國に於ける地縁團體の成立過程 -. 經濟論叢 1933, 37(6): 873-883

ISSUE DATE:

1933-12-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130380>

RIGHT:

# 京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第六號

第三十七卷

昭和八年十二月一日發行

## 論叢

所得稅改造の一案……………法學博士神戸正雄

企業と所得稅負擔……………經濟學博士沙見三郎

經濟本質論……………經濟學博士石川興二

## 時論

小賣更生策としての自由連鎖店……………經濟學博士谷口吉彦

## 研究

投機と取引所……………經濟學士今西庄次郎

アリストテレスの價值論……………經濟學士白杉庄一郎

アングロ時代の社會單位について……………經濟學士竹中靖一

## 說苑

マールの利子論……………經濟學士青山秀夫

一般均衡論と交換方程式……………經濟學士柴田敬

## 附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

本誌第三十七卷總目錄

# アングロ・サクソン時代の社會單位について (下)

——英國に於ける地緣團體の成立過程——

竹 中 靖 一

## 三 地緣團體の形成(續き)

### (2) 村落共同體とハイドとの關係

ハイドなるものは、經濟史乃至は法制史上、有名な語であつて、多くの人々によつて重要視せられ、種々の論議がなされてゐるが、その性質は尙明確でない。

併し乍ら、ハイドが地積の單位でなかつたことは略々明瞭である。一二〇エイカー、一六〇エイカー、一八〇エイカーなどの土地が、屢々ハイドの大きとせられてゐるが、それは尺度又は地積の單位であるファロング furlong (もと fallow long 卽ち畦の長さ)と云ふ意味である<sup>9)</sup>が幾エイカーかの大きをもつと云ふことは同じ意味に於いて考ふべきでない。ハイドは、普通、耕地の外に、草地、牧場、菜園その他の權利を包含したものである。(註)

(註) Maitland はハイドを一二〇エイカーの地積の單位なりと主張する。<sup>10)</sup>

9) Vinogradoff, The Growth of the Manor. p. 252; cf. ditto, English Society in the Eleventh Century. 1908. p. 148.  
10) Maitland, Domesday Book and Beyond. p. 357.

ハイドが地積の單位を意味しないことは、場所によつてその大きが異り、また同一場所に於いてもその大きに變化があつたことによつても推定される。即ち、ある村落では、ハイドが一二〇エイカーの耕地に對する權利を意味するものであるが、その隣村では一六〇エイカーの耕地に對する權利に相當することもあり、更に同一村内に於いても、或意味では一二〇エイカーがハイドの單位とせられるが、他の意味に於いては一四四エイカーがハイドと考へられ、また或年には、新らしく開墾せられた結果一六〇エイカーがハイドと定められたこともあつた。<sup>11)</sup>かくて、ハイド hide は地積の單位と考へるには、あまりに不確定な量である。

寧ろ、ハイドは、村内各戸の持分の單位と見るべきであらう。蓋し、時と所によつて大きに異なる所があつても、同時に同一村内に於いては、異なる大きをもつことがないからである。併し乍ら、持分の單位としてのハイドにも、亦二つの異なる意味が見出される。即ち、一は、租稅負擔分配上の見地よりするものであり、他は、耕作上の見地よりするものである。

# (A) 課稅單位としてのハイド Domesday Book, Geld Inquest, Hundred Rolls その他の

記録の中には、ハイドは課稅單位として現はれてゐる。而て、それは公課割當のための人爲的な單位であつて、必しも農耕上の單位たる土地の實際の地積とは一致しないものがあつた。故に、多くの記録には、Geld-hide, geld carucate なる名稱が使用せられて、real hide, real carucate から區別せられ、また、acre-ware, ware-acre などが、real acre から區別されてゐる。<sup>12)</sup>

11) Vinogradoff, op. cit. p. 156.

12) Vinogradoff, op. cit. p. 153; ditto, Villainage in England, 1892. (Impr. 1927). p. 242.

一定の公課は、普通、上から課せられて、それが下級の單位へ分割される。かくて、百人組に二十シリングの租税が課せられる場合、之に對してあるトウン<sup>13)</sup>は六ペンスとか四ペンスとかを分擔據出するのであるが、他方、トウン<sup>13)</sup>は、ハイド又はカルケイトによつて課税されるのであるから、政府は、一ハイド又は一カルケイトより二十シリング宛とか三シリング宛とかを要求することもあつた。ドウムスデイ調査簿 Domesday Book には、この兩種の表現法が見出される。<sup>13)</sup>

然るに、公課負擔の實際の評價に關しては、大なる單位が、更に幾つかに分たれるのであつてゲルド・ハイドとかゲルド・カルケイトは、一定數のヴァーゲイト若しくはボヴェイトに相當するものと考へられ、また、これらの單位は更に小單位なるエイカーに分割された。併し、かくの如き諸單位についてもその人爲的な性質には變りがなかつた。但し、一般にはハイドやカルケイトやスラングを實際の農耕上の持分と一致させて分割し、従つてそれらを何れも一二〇エイカーに分つことが普通に行はれてゐたのであらう。

併し乍ら、何れにしても、課税單位と實際の土地の持分との關係は決して簡單に考へることが出来ない。ドウムスデイ調査簿には、ハイドの數に關する記錄の他に、實際の耕作組の數とそこに置きうる耕作組の數とに關する精密な記錄が見える。即ち、課税さるゝ耕地(hide)と、實際に耕されてゐる耕地(carucæ)と、耕し得る耕地(terra carucæ)との三項目について、調査が行はれたのである。<sup>14)</sup>かくの如きは、課税簿にあらはれたゲルド・ハイドやゲルド・カルケイトなどが、も

13) Vinogradoff, The Growth of the Manor, pp. 154, 254.

14) ibid. pp. 157-8

はや土地持分の實際とは嚴密に一致しなくなつた結果であらう。もと、カルケイトやスルングなどの單位は確かに一の耕作組の耕し得る土地 *plough-land* を意味したものであり、ハイドも恐らくさうであつたであらうが、ドウムスデイ調査の時代には、もはやかゝる意味を失つてゐるのである。

### (B) 耕作單位としてのハイド

かくて、ドウムスデイ調査簿を通じて窺はれる頃の社會、言ひ換ふれば、アングロ・サクソン時代の末期には、課税單位としてのハイドは實際の耕作上に於ける單位たるの意味を失つてゐたと見るべきであるが、併し、それ以前の社會にあつては、ハイドは土地耕作の實際と密接な關係をもつてゐたものと考へられる。故に、耕作上の單位としてのハイドについて、我々の考察を進めるであらう。

ドウムスデイ調査簿によれば、一定の租税全額の負擔が、端數のない一定數のハイド及びカルケイトに分たれて、各州 *shire* に分割せられ、更に各州はそれをハンドレッドの間に分割し、最後に、それが各タウンシップ *township* に割當てられた。而て、大なるタウンシップには十ハイドが割當てられ、小なるタウンシップには五ハイドが割當てられるが、村内各借地人は、またそれぞれかくの如き十乃至五の集團に分れて、その集團内でそれぞれの能力に應じて相當な持分をもつのである。かゝる持分の單位が、即ち、ハイド、ヴァーゲイト、ボヴェイト、エイカー、その他之に相當するものであつた。

公課もしくは行政上の目的のために、社會單位を再分する組織はアングロ・サクソン時代の古い記録にも残つてゐる。<sup>15)</sup> エドウィンの頃のものと思はれるが、ハイドを氏族に分つた記録さへ見出される。<sup>16)</sup> かくの如き制度の存在は、課税單位が人爲的に定められたことを想像せしめるが、しかし、かゝる制度の下に於いても、尙、二つの點より實際の農耕上の事實を考へることが出来るであらう。即ち、課税は比例的であつたから、各地各人の相對的經濟力を説明するであらうし、更に、各種の租税は實際の收入に相應すべきであり、従つて、この收入の近似的評價から出發したに違ないからである。

併し乍ら、かくの如き明かな關係から離れても、ハイド、カルケイト、ボグエイト、エイカー等の單位は、何れも元來は、實際の土地割當ての單位であつた。エイカー acre は本來より地積の單位であり、畑地の區劃であつた。同様に、ボグエイト bovate は耕作組に於ける牛一頭の勞働に相當する耕地と共に、この持分に附屬する牧場、林野、河川に關する一切の權利を意味するものとして出來た言葉であつた。<sup>17)</sup> ヴァーゲイト virgate は、時に「耕作組の四分の一」をあらはす言葉とせられるが、これは本來 yard-land (即 a rood of land) を翻譯せるノーマン語であつて、一ルードの土地から由來するものであつた。<sup>18)</sup> ヨウクも亦恐らく四頭の牛によつて耕さるゝ土地を意味するものであつたであらう。カルケイトとスルングとは、共に確に、完全なる一組の耕作組のためにあてられる實際の土地の持分と考へられてゐた。ハイド、即ち hwise of land は明かに

15) Maitland, op. cit. p. 502.

16) Vinogradoff, op. cit. p. 159.

17) Seebohm, English Village Community. 1883. (Impr. 1915.) pp. 36 sq.

18) ibid. p. 120.

もと、『二戸の借地』の意味をもつ單位であつた。<sup>19)</sup>

かくて、公課の割當ては、決して架空の計畫によつてなされたものではなく、實際の農業上の單位に従つて定められた制度であつた。カルケイト・スルング、ハイドなどの單位は、常に農事の單位として、即ち最も典型的な持分として用ひられた。而て、アングロ・サクソンの古記録には、土地の賣買譲渡に際し、地積の單位としてハイドやカルケイトやスルングなどが使はれたこともあつた。<sup>20)</sup>これらの單位は、何れも一組の耕作組によつて耕さるゝ土地と多少とも密接な關係があつたから、ほど一樣に耕地一二〇エーカーの大きを示す傾向があつたのである。<sup>21)</sup>併しその大きが必しも一二〇エーカーに一定しないのは、恐らく、第一には、二圃制の行はるゝ所と三圃制の行はるゝ所とがあり、更に第二には耕作が重ぜらるゝ所と牧畜が重ぜらるゝ所とがあつた爲であらう。蓋し、三圃制の行はるゝ所では二圃制の行はるゝ所よりも多くの土地を要し、更に牧畜の重ぜらるゝ所では、保有する土地の面積は、比較的大であるが、割當てられた耕地は比較的に小であるからである。

要するに、ハイドの形成は、單なる課税上の手段や、土地の偶然なる分配などではなく、權利の複雑なる交錯と、近隣者のたえざる共同の必要と、を生じたる村落共同體に於ける、土地保有者の權利義務の分配を必要ならしむる農業上の習慣と關聯して發生したのであつて、土地の實際の保有關係に基づくものであつた。而て、それは、宅地や菜園、耕地や草地、若しくは、牧場、森林、

19) Vinogradoff, op. cit. pp. 160, 256.

20) ibid. op. cit. pp. 161, 256.

21) Seebohm, op. cit. p. 37., Maitland, op. cit. p. 490.



河川湖沼に於ける權利の標準を與へ、農業經營上に於ける家族の協同する基礎を與へたのである。かくて、一方には各戸の成員の單位内に於ける結合を必要ならしむると共に、他方には、政府の要求やあらゆる政治上の義務は、すべてこの單位に従つて割當てられたのであつた。

(3) **村落共同體の農業制度** 以上述べし如く、村落共同體は各戸の持分よりなる共同體であつて、その典型的なる構成單位たるハイドの如きも、課税單位であると共に、もと各戸の持分をあらはすものであり、従つて、實際の農業上の單位と考へられるものである。然らば、その持分は如何なる内容をもつてゐたか。今、我々は、一應、村落共同體の農業制度の概略を省みなければならぬ。

先づ、各戸は荒地に關して、共同且つ不可分の使用權をもつてゐるが、村落共同體は、必要に應じて、之を制限しまたはその割當を行ふことが出来る。この荒地は村落共同體に屬する大部分の土地に亙つてゐる。而て、排他的な耕作若しくは娛樂を目的として開拓することは、一定の制限を受ける。僅少にして、且つ價值多き草地は、嚴格なる規則の下に、持分に相應して分配せられ、常に割替が行はれる。耕地は、村落共同體に於ける最も重要な要素であつて、最も顯著なる部分であるが、各戸の持分は村の多くの畑の中に條地 strip となつて散在し、原則として他家の持分と均等である。各人は、穀草の轉換と耕作とに關して同一の規則と方法とに従はねばならず穀草が收穫された後は、各條地は開放地として共同使用に任かされる。屋敷とその周圍の菜園と

は各自の經營の下に置かれるが、それも村落共同體によつて割當てられ、且つ必要な場合には、割替が行はれることもあつた。

かくて、村落共同體の内部を支配せし慣習と法則とは、村内各戸の持分の間に成立する利益と權利とよりなる共同體と云ふ觀念に歸するであらう。而て、この慣習と法則によつて、各人は社會生活の全般に亙り、自由なる處置と自由なる經營とが阻止せられ、政府の力も、個人的法理論も、共に、之を如何することも出来なかつたのである。かくの如き農業制度が、凡そ紀元五〇〇年頃より一五〇〇年に至る一千年を通じて略々變はらなかつた状態であつた。即ち、これらの状態は、ノーマン征服の以前即ちアングロ・サクソンの時代より、既に、多かれ少なかれ見ることが出来たのである。<sup>22)</sup> (註)

(註) アングロ・サクソン時代に、これらの制度が、如何なる状態にあつたかを詳細に検討すべき必要がある。そして、それはこの時代の經濟組織の中心に關する問題であるが、他日を期して、改めて検討し度いと思ふ。

要するに、村落共同體は各戸の持分よりなる共同體であつて、その持分は土地に關する持分であり、而も共同體全體として、農業經營の上に於ける有機的な統一を保ち、従つて、經濟單位としての充分なる意味をもつものであつた。

(4) 村落共同體の政治組織 最後に、村落共同體に於ける以上の如き複雑なる持分の制度は如何なる機關によつて維持せられたか。この問題に關しては、徴すべき直接の資料少なく、主

22) cf. Vinogradoff, op. cit. pp. 166 sq., Maitland, op. cit. pp. 347. sq., W. Cunningham, the Growth of English Industry and Commerce vol. i. 1882. (ed. 1905) pp. 61 sq.

として中世の資料から推測するの他はないが、耕地、林野等に於ける共同的行為に關する問題について少くとも何らかの効果ある組織が必要であることは疑がないであらう。而て、そのためには、慣習が強い力であつたことも亦、推察に難くない。併し乍ら、この慣習も、それが力となるためには、その慣習上の事實が取極められ、決定せられねばならぬ。

中世に於ける所謂 *by-law* は、農村の慣習法であつて、例外的な自由を許されてゐた自由人も之に従はねばならぬものであつたから、それは恐らく古き村落共同體以來の慣習を示すものであつたであらう。<sup>(23)</sup> 而て、この慣習による統制が行はるゝ方法には二種類あつた。第一の方法は集會や法廷で、規律が審議せられ、布告せられるのであつて、第二の方法は、その事項に通曉せる人々によつて宣言されるのであつた。前者の場合が狹義の *by-law* であるが、後者の方法をとつて、村内各戸から鑑定人が選出さるゝことも全く普通に見らるゝ所であつた。

(註) *by-law* は *law of a by* であつて、*law of a township* に他ならぬ。

次に、村に於ける日常の行政と警察とは、如何にして、如何なる機關によつて行はれたか。これについても資料に乏しいが、専門的な仕事をする機關としては次の如きものを舉げることが出来る。<sup>(24)</sup>

*herdsmen, shepherds, swineherds*——何れも家畜の世話をする。

*graveas of moors*——家畜の世話と共に湖澤の管理をする。

23) Vinogradoff op. cit. pp. 187—8.

24) *ibid.* p. 190.

dykegreaves —— 海邊の侵入者を防ぐ。

woodwards, heywards —— 前者は森林の番人であり、後者は生垣の世話をする。

併し、村全體の中樞となり、村の代表となる機關が必要であつたこと言ふまでもない。而て、かゝる機關の最も古いものは、reeve, greave, gerefa 等であつた。アングロ・サクソン時代にも、既に領主權がかなり發達を遂げてゐたから、リーヴは領主の代官たるの性質を帯びてゐたが、ノーマン時代及びハンドレッドの制度に關する政治的文獻にはリーヴは、五、六人よりなるタウンシップの代表者の一人としてあらはれてゐる。これらの代表者は、何れも法廷の陪審官であつて地方の習慣、地方の事件、地方の經濟狀態に關して、證言を與ふるために呼出されたものであつた。<sup>25)</sup>このことは、たゞちに、アングロ・サクソンの賢人 *witan* の制度を聯想せしめるであらう。即ち州會 *shirenoot* や國會 *witenagemote* やに於ける賢人は、その州やその民族の慣習について意見を述べるものであつた。この點に於いて兩者には互に相通するものがある。

尙、村落共同體會議 *township moots* の構成と組織とについては、アングロ・サクソン時代の資料に徴すべきものが殆どないが、その存在せしことを示す資料は必しも少しとしない。<sup>27)</sup>

#### 四 結 言

以上瞥見せし如く、アングロ・サクソン時代には、尙、血縁團體の殘存形態が存在し、氏族、

25) *ibid.* pp. 193, 272.

26) *ibid.* p. 193.

27) *ibid.* pp. 193-4.

戸などが有力なる單位となつてゐたが、彼等が次第に農耕を重するに従ひ、土地が重大なる要素となつて、戸の如きも、戸の土地と云ふ單位と結び付くやうになつた。他方、血縁關係の弛緩すると共に、社會組織は一般に弛緩するの傾向を示したが、かゝる傾向に對する反作用として、漸次村落共同體（township）が形成されたのである。然るに、村落共同體の基礎的要素はやはり戸の土地（ハイド）にあつて、村落共同體は戸の土地を單位として結合された最初の地縁團體と見ることが出来る。村落共同體は、土地に對する各戸の持分よりなる共同體であつたが、それは有機的な一體となつて、農業上の單位となり、經濟的單位としての充分なる意味をもつものであつた。かくて、その上にマナーの制度が建設される地盤が準備せられたのであるが、他方、村落共同體に必要な政治組織も亦發達し、後にマナーの制度が完成した時に於いても、行政單位としては、尙、township に相當する维尔（维尔）の名が屢々見出されるのである。<sup>28)</sup>之を要するに、村落共同體は、血縁團體の崩壞の後に、最初的地縁團體として形成されたのであり、後のマナーの制度に對して、經濟的地盤となつたものである。

正誤、前號一三一頁三行三分の二は三分の一、同四行三分の一は三分の二の誤記。

28) Pollock and Maitland, History of English Law, 1895 (ed. 1911), Vol. 1, pp. 547. sq.; Maitland, op. cit. pp. 129. sq.